



青少年赤十字

第18号
2013.3

賛助ひろしま

青少年赤十字賛助奉仕団信条

- 1. 青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
- 1. 赤十字思想の普及啓発に努め、平和な社会の実現に寄与する。
- 1. 志を同じくする人々と手をとりあい、研鑽に努める。

発行 広島県青少年赤十字賛助奉仕団 〒730-0052 広島市中区千田町2-5-64
 事務局 日本赤十字社広島県支部 TEL (082) 545-5011

平成二十四年度全国青少年赤十字
賛助奉仕団協議会総会（報告）

委員長 日高敬司

平成二十四年七月六・七日、日本赤十字社本社において、全国四十七都道府県委員長、日赤本社関係者六十余名が参加して開催されました。

○第一日

一 開会式、写真撮影

二 総会

①平成二十三年度事業・会計・監査報告

②役員改選

③平成二十四年度事業計画・予算案

④創立五十周年記念事業（平成二十六年）

三 ブロック会（第五中国・四国地区）

①会員の高齢化・会員の確保について

②指導者協議会との連携

③他奉仕団との連携・共同研修会など

④賛助奉仕団員の加盟校促進に果す役割

⑤県青少年赤十字大会・研修会・トレセンなどへの積極的参加

⑥防災教育の在り方

○第二日

一 講演「東日本大震災における日本赤十字社の復興支援活動について」

日本赤十字社復興支援推進本部

惨事 志波一顕

二 証言「東日本大震災その後について」

（岩手・宮城・福島県の委員長から一年後の

状況について報告されました）

三 ブロック会報告

四 全体討議
五 閉会式

平成二十四年度中・四国ブロック
青少年赤十字賛助奉仕団連絡協議
会・研修会（報告）

副委員長 山中 章敬

十月四・五日に香川県高松市で青少年赤十字賛助奉仕団第五ブロックの研修会が開催され、

① JRCの加盟校拡大・新入団員の増加方策

② JRCの質的向上の目指す活動のあり方

③ 指導者協議会・関係奉仕団との連携方法

などを課題として加盟校の実践発表、情報交換、意見交換が行われました。

広島県からは、来年度開催県ということもあり、

日高委員長、野田副委員長、山中副委員長そして

県支部の岡田さんの四名が参加しました。

○第一日

一 開会行事

開会のことば、信条唱和、挨拶、日程説明、記念撮影

二 実践発表

① 香川県三豊市立豊中学校

「気づき、考え、実行する体験活動」

「望ましい集団の育成のために」

② 香川県高松市檀紙小学校

「自ら学び、気づき考え、実行する児童の育成」

「友だち・もの・自然・人との関わりを通して」

（JRCの態度目標を大切にして活動すること

）

で心豊かな児童生徒の育成図っていることや、よい行いをする子どもの姿で地域に発信しパワーを与えていることがよくわかりました)

三 連絡協議会

① 加盟校拡大・新入団員の増加方策

★県教委の加盟登録推奨文により加盟校の増加(高知、山口、広島)

★賛助奉仕団の団員の高齢化や減少で悩む

② JRCの質的向上の目指す活動のあり方

★ソルフェリーノの丘に群生していたイトスギを加盟校に植樹する活動で効果を挙げている。(植樹した学校はJRCを続けている) (香川、山口、愛媛)

★トレーニングセンターへの支援

参加者の減少・スタッフの不足などで苦悩している。(鳥取、島根)開催ができなかった

(岡山)

JRCの質的向上にはトレセンの充実が欠かせない。指導経験豊富な賛助奉仕団員の支援などで指導者協議会と連携してトレセンの強化を図るなど意見ができました。

③ 指導者協議会・関係奉仕団との連携方法

★三・一を教訓として、災害時に他の奉仕団と連携して何ができるか見直す必要がある。

★安全奉仕団や地域奉仕団の災害時における活動、子どもの発達段階に応じたJRCの実践活動など、それぞれが多忙の中で連携のあり方を考えたい。

④ その他

★いじめ、命の問題など多くの課題

★稲村の火など防災教育に有効

二時間二十分の連絡協議会は各県の課題や悩

みについて熱心に協議され、あっという間に終了しました。

○第二日

一 研修・視察「日プラ株式会社」

水族館用の大型アクリルパネルの製作で夢と感動を与えるオンリーワン企業、世界の七十%のシェアを誇る。敷山専務の説明は大変参考になりました。アクリルの貼り合わせるに試行錯誤を重ねうどん使ったらうまくいったという話など参考になりました。



(アクリル板を見学しているところ)

二 昼食 鯉鮎料理で有名な郷屋敷で昼食

三 閉会式
来年度開催県である本県の日高委員長の挨拶で閉会
来年度は広島県で開催です。

平成二十四年度 広島県青少年赤十字賛助奉仕団総会 (報告)

総会は例年、県大会の日に合わせて行っていました。今年の日時の都合で独自に設定し、十一月十六日(金)日赤血液センター研修室にて行いました。内容は次の通りです。

一 活動状況等について

昨年度活動・会計状況、本年度活動状況及び予算執行状況について報告しました。会計報告は別紙にてお送りします。

新入団員紹介、今年度新たに二名の新入団員がありました。また昨年度をもって退団された方は七名です。団員の高齢化に伴い、退団者が増え行く傾向は否めません。役員の補充について、幹事一名の追加が承認されました。

二 団費について

過年度未納分の請求については追加請求額が高額になり負担増が懸念されるので、過年度分の請求はしないこととしました。

三、来年度の中四国ブロック賛助奉仕団研修会について

・平成二十五年度は広島県が担当県に当たるので、計画を早めに立ち上げる。

・開催時期は十月第一週又は第二週の木、金曜日とする。

四、広島県赤十字ボランティア研修会について
例年通り二月頃を予定し、JRC活動の活性化をテーマにあげ、研修を行うことを確認しました。

五、その他
・全国高校総合文化祭広島大会が五年後に開催されることを今から考慮しておく必要がある。
・支部活動として、「いとすぎ」を育てる事業を来年度事業計画に組み入れる。

平成二十四年度青少年赤十字トレーニングセンター（報告）

今年度のトレセンは次のとおり行われました。
一 小学校

①期日 平成二十四年八月二十日～二十二日

②会場 広島青少年スポーツセンター
(三原市大和町)

③参加校数 五校

④参加児童数 十七名

⑤スタッフ 十二名

⑥賛助奉仕団スタッフ 二名
(野田崇、河戸靖子)

二 中学校

①期日 平成二十四年八月十七日～十九日

②会場 広島青少年スポーツセンター
(三原市大和町)

③参加校数 七校

④参加生徒数 三十三名

⑤スタッフ 十六名

三 高等学校

①期日 平成二十四年八月十七日～十九日

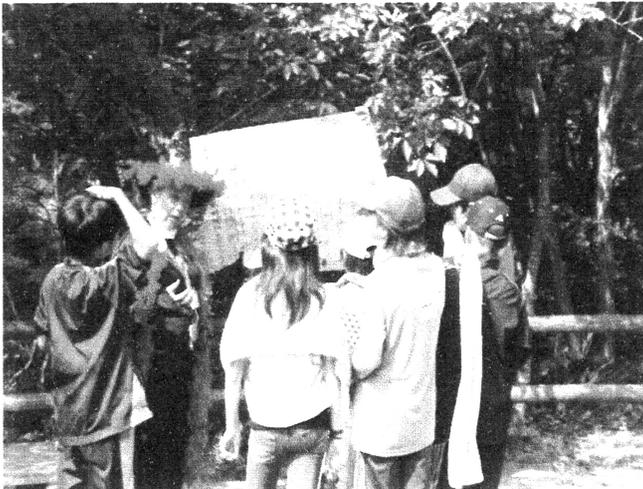
②会場 白龍湖スポーツセンター
(三原市大和町)

③参加校数 五校

④参加生徒数 三十三名

⑤スタッフ 十一名

⑥賛助奉仕団スタッフ 三名
(日高敬司、野田崇、采谷宣子)



(小学校・フィールドワーク)

『青少年赤十字展』開催 〜東広島市生涯学習フェスティバルに 参加して〜

顧問 横田二郎

十一月三日・四日に行われた東広島市生涯学習フェスティバルに参加し、広島県青少年赤十字賛助奉仕団が東広島市赤十字奉仕団と協力して「東広島市・青少年赤十字展」を実施しました。

東広島市内の「青少年赤十字（JRC）」加盟校の賀茂高校・西条農業高校・河内高校が、それぞれの青少年赤十字活動の状況を展示により発表したのをはじめ、赤十字活動・青少年赤十字活動・献血活動等についても展示、DVD放映、関係資料の配付等を行い、青少年赤十字の東広島市における活動への理解が深められることを期待して実施し、成果のあったものと思っています。

生涯学習フェスティバルへの参加者数は、三日は一三、三四〇名、四日は九、五六〇名、合計二二、九〇〇名でした。

青少年赤十字では、自ら課題に「気づき」、その原因や解決のための道筋を「考え」、問題解決のために「実行する」生活態度目標とともに、生命と健康の大切さを学び、人間尊重の精神を養う「健康・安全」、社会や世界の一員としての責任と自覚を育てる「奉仕」、異なった文化や習慣を越えて世界の仲間と仲良く生きる力を育てる「国際理解・親善」の三つを実践目標として活動しています。

現在、東広島市内の青少年赤十字加盟校は、小学校七校、中学校一校、高等学校六校ですが、こ

れらが赤十字奉仕団とともに、地域の市民の方々や関係諸機関・団体等と連携し、協働して活動することにより、赤十字活動の充実と青少年の健全育成に寄与できればと考えています。

このたびの「青少年赤十字展」の実施に当たっては、東広島市教育委員会・日本赤十字社広島県支部・同東広島市地区（東広島市社会福祉課）・広島県赤十字血液センター等から、学校等への周知、資料提供等々、ご協力をいただきましたことを有り難く心から感謝しています。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

平成二十四年度広島県赤十字ボランティア研修会

見出しの研修会が、平成二十五年二月二十二日に、日赤県支部で行われました。対象は各赤十字奉仕団員を対象としたもので、四十三名の参加者で、青少年赤十字賛助奉仕団からは五名参加しました。また、野田副委員長が講師として招かれました。

○研修会内容

- 一 開会挨拶 県支部事務局長 桂木弘二
- 二 アイスブレーキング
- 三 講義「赤十字と奉仕団」
県支部指導講師（賛助奉仕団） 野田崇
- 四 ハイゼックスによる炊き出し体験
県支部指導講師 浅野千明

（一合のお米とめんつゆ、かつお、ちりめんをプラスチックの袋に入れて、熱湯に漬けて非常食を作る体験をしました）

五 グループワーク

（以前の血液センターに日赤県支部が移転し、一階は非常用品倉庫になっています。その倉庫整理の一部を参加者で行いました。）

六 講習

「災害時に役立つ応急手当・避難所でのケア」

県支部事業課 阿部直美

- ① 災害が高齢者に及ぼす影響
- ② 気を付けたい病気や症状
- ③ 知って役立つ介護技術



（「講習」グループ話し合い）

（会員だより）

全国高等学校総合文化祭プレ大会 （長崎県・五島）に参加して

副委員長 野田 崇

「二〇一三 長崎しおかぜ総文祭」【JRC・ボランティア部門プレ大会兼JRC高校トレセン】が、長崎県・五島の三井楽町で八月六日～八日の日程で開催されました。

JRC指導者の縁（スタディセンタースタッフを共にした）があつて、プレ大会のプログラムの中で「ボランティア活動の楽しみ」のテーマで講演を依頼され、五島に赴きました。

福岡空港から五島・福江空港まで好天気に恵まれ九州北部を眼下に見ながら、快適なフライトでした。五島・福江港で長崎県の参加者・スタッフと合流し、会場の三井楽町多目的研修集会施設に向かった。途中遠回りになったが、FWの現地になる三井楽町をバス内から見学した。到着後、会場作り・昼食・スタッフ打ち合せとあわたたしく準備をし、プレ大会・TCをスタートさせた。

開講式・オリエンテーション後、一五〇〇から「ボランティア活動の楽しみ」をテーマに八〇分講演を行った。

参加者（六八名）・スタッフ（引率一八名を含め二三名）はJRCのメンバー指導者だけでなく、インターアクトなどの高校ボランティア団体も参加していたため、赤十字の理念と活動や歴史・JRC活動の目標を交えながら話をした。

初めに気づきの大切さを「東日本大震災・日本

赤十字社の取組み四五日」DVDを鑑賞し導入にした。初めて見る参加者が多く地震・津波の被害の大きさに息をのみ、赤十字の救援活動に感心した。更に、福島原発事故が被害の複雑さ・混乱を広げていることの理解を深めた。参加者の「気づき」「考える」の一助になり「わたしに何ができる」と、行動に移す考えを促したと、感想している。

「気づき」「考える」「実行する」実践目標の視点としてNeeds-Desireについて、Needs 気づきの多様性・Desire 自己満足から説明した。VS (ボランティア活動)の楽しみは、個々人の受け取りと感性であり多様なことであっても、Needs に応えて充実するものと話した。そして、赤十字もわたしも、高校生が「人道的価値観を持った人に成長して欲しいと強く願っている」ことを伝え、「わたしは、そのための支援をします」と決意を表し講演を終えた。

二日目、三井楽町の現状と課題を明らかにし問題解決を探るため、FWに出かけた一〇班は町内四カ所に分散し町民にインタビューや町内を見聞することで情報を集めた。多目的施設に戻った参加者は、グループワークトレーニング・健康安全プログラムを展開後、FWで集めた情報を分析しFWの発表を夜遅くまで準備した。

三日目、FW発表会を開き、一〇班それぞれに工夫した発表を行った。最後にWSで、TCで学んだことを今後の生活で生かす課題を明らかにし、プレ大会・TCを終了した。

「二〇一三長崎しおかぜ総文祭」を一年後にひかえていることもあって参加者もスタッフも熱意ある行動でした。わたしの講演対し熱心に聴いて

いただいたことを感謝しています。

(二〇一七年は、「全国総文祭広島大会」の予定です。準備と態勢作りが急がれます。)

「真に生きること」

顧問 田中博

青春時代、千人針を腹に巻いて死を覚悟の毎日を過ごした。一番早く死ななければならぬ、そのような私が、六十歳まで中学校の教員として勤め、その後七十五歳まで、第二就職、地域などの諸種のボランティア活動を経て、現在、齢八十五歳を生きている。

今日世界における運動を大観すると、おおよそ三つ考えられる。生存競争主義、無抵抗主義、強制主義である。殆どの世界の大部分が、生存競争主義の鉄則に支配されていると言つて過言ではない。無抵抗主義は弱者の報復手段である。真の生き方の理想を共生主義に求めるなら、〇〇になった、何々の賞を貰ったは真の生き方からすれば生存競争主義の現象の上に立つ枝葉に過ぎない。

少年から大人まで、JRCの心を体得することは真の生き方に通じると言える。

幼児の心に赤十字の愛の種を

副委員長 大木 昭

当地区の広島市立高南保育園の玄関に入ると右



側の壁面に青少年赤十字の旗が添付してあり、その横に園児のかわいい絵が展示してある。また、その左側の受付窓の棚には牛乳パック利用の一元募金箱を置いてある。

社協主催で地域の一人暮らし高齢者の集いに毎回協力参加してもらっている。他に高齢者の笑顔のために業をしているが、参加者全員一味違った笑顔を共有させて貰っている。

この種は芽生えた。根を張り綺麗な花を咲かせ、充実した実を付けるだろう。

「今、できること」

副委員長 河戸靖子

退職後数年かけて本読みボランティアの研修を終え、念願の「本読みおばさん」になった。「今週はA小学校の三年だ。この本が楽しいかな。次はB保育所だ。指人形も持って行こう」など、思いを巡らせて、準備をするのが楽しい。毎回二十分程度である。二十分に勝負をかけるのは実に生き甲斐がある。

さて、夏のある日、読み聞かせの会に参加したとき、先輩が子どもたちに淡々と読み始められた内容は擬人化された広島のアオギリの木が原子爆弾の投下で、大勢の人々の死を見つめ自らも焼き焦げつつも、再び発芽し、種を結び、生命の尊さを伝えたいと願う話である。炎に包まれる場面に子どもたちは声もなく見入っている。聞いていた私はその時二つのことを思い出していた。

一つは「ヒロシマの心を全国の人に知ってほしい」と、被爆アオギリの種を修学旅行生に渡しておられた方の姿である。もうひとつは、広島の人マルセル・ジュノー博士である。

私たちは広島で活躍された国際赤十字委員会のジュノー博士を忘れるわけにはいかない。自らも医師であるジュノー博士は原爆投下直後の九月、十五トンもの医薬品を携えて広島に入り、直接医療に当たられ多くの人々を救ってくださった。赤十字の人道的な立場から「自分にできることを」と治療されたと聞いている。

そして私は数年前、機会をいただきジュネーブのジュノー博士のお墓参りをした。午後、ご子息

のブノワ・ジュノー氏のお宅を訪ねた。すると、お庭に数本のアオギリの若木が青空にそよいでいるではないか。驚いて木を見上げている私に子息のジュノー氏は「私も自分にできることでスイスの人々にヒロシマの心を伝えたいのです」と言われた。

私も本を見ていた子どもたちにアオギリのそよぐ平和な青空を約束できるように、ささやかでも、何か自分にできることを続けていきたい。

「中国新聞夕刊「でるた」平成二十四年七月二十一日（土曜日）掲載」

自分史「私の人生から」(その一)

岡田孝裕

決断 教員退職と(財団法人)広島青少年スポーツセンターの創設

一、JRC(青少年赤十字)との出会い

三年間の福富町での勤務を終えて、昭和三十六年春地元大和町立神田中学校に赴任した。ここで私の教員生活を決定づける出会いに遭遇した。それはJRC(青少年赤十字)との出会いである。赤十字の精神を学校教育に生かすこの取り組みは、戦後まもなく始められ、加盟校という形で推進されていた。神田中学校はこの加盟校だった。赴任すると直ぐ校長先生と呼ばれて、生徒会指導と青少年赤十字指導の担当を命じられた。青少年赤十字がどのようなものか全く判らないし、ましてど

のように指導してよいかも判らない。しかし兎も角やらなければならぬ。広島県赤十字支部における会合に参加し、夏恒例的に実施されるトレーニングセンターに参加することになった。

世界の赤十字はスイス人のアンリー・デュナンが創設した組織で、イタリヤ独立戦争の際、敵味方の差別なく救助したことが発端になっている。アンリー・デュナンはたまたま旅行者としてその場に立ち会い、やむにやまれぬ気持ちから救助したことに始まる。

だから、「気づき、考え、実行」が原点なのだ。

当時の学校における風潮は議論の徹底はあるが所詮議論倒れになることが多い。考えたら実行しなければ意味がない。私は実行に力点を置く青少年赤十字が好きになった。その上、日赤県支部の指導課長に三原中学の同級生だった福原道彦君がいたのも奇遇だった。福原君と意気投合したこともある。

翌年には、富士山麓の御殿場にある東山荘で行われた全国指導者講習会(一週間)に参加して本格的な訓練も受けた。この講習を受けて県トレーニングセンターの指導者となり、県内に多くの知己を得た。神田中学校にいた九年間の中で、一番の思いでは青少年赤十字だった。国泰寺中学校の校長をされていた加藤惣一先生とも親しくしていた。

この会の良いところは、職階による差別がなく、みんな気さくで、親しみやすい点である。誰もが同じ人間という原点があり、変な遠慮もなく、真の友人になれることだった。

当時、県教委の指導主事だった森田寛先生(志和町)にも熱心な指導を受けた。現場の神田中学

校では実践活動を重視し、学校を挙げ教職員が一体となった活動に取り組んだ。

二、椋梨ダム（白竜湖）湖畔に青少年訓練施設を建てよう

当時、県内のトレーニングセンター開催は定着した施設がなく、小学校、中学校、高等学校、指導者、別にそれぞれ三泊四日合わせて十六日間、夏休み中に行われていた。県内の学校のうち、交通の便利な加盟校を選んで行われるのが常だった。呉の東畑中学校や三次市の三次小学校での思い出がある。開催校を引き受けると設営が大変である。風呂を自前で作ったり、寝るところは教室にゴザを引いて雑魚寝をするのである。設営も創意工夫、これも「気づき、考え、実行」の訓練の場でもある。しかし夏のことで食中毒などが出ては大変なことになる。

日赤県支部も問題点として認識していた。誰言うとはなく、フランチヤイズが欲しい、即ちトレーニングセンターが開催できる固有の施設が欲しいということだ。夜の指導者ミーティングで話だった。私が冗談半分に「大和町に今度椋梨ダム（白竜湖）ができる。その湖畔にその施設を作ればよいのではないか」と言うと、皆異口同音に其れは良いことだと言いつつ、考えてみると我ながら良い着想である。昭和四十三年に完成した椋梨ダムは山陽本線に最も近いダムと言われ、観光開発で注目を集めていた。しかも、広島県のほぼ中央に位置している。これは案外、取って置きの提案かも知れないと感じた。その時の話の延長に「岡田先生、自分等に財力はないけれども、精神的な援助はいくらでもするよ。あんたがやりんさい」と

声がかかった。好いとも、悪いとも応えないままその場は終わった。しかしこのことは何か私の脳裏に深く刻み込まれたのだった。

夏も過ぎ秋になった。運動会のシーズンである。その当時は先生が交代で毎晩宿直をしていた。私とその宿直当番の夜、青年団活動を一緒にやり、親友だった町会議員の神谷議員が訪ねてきた。諸々の話をする中で、たまたま椋梨ダム（白竜湖）のことが話題になった。

神谷君が「それはいい話だ、わしが河野町長に話してみよう」若くして町会議員にでるだけの鋭い感覚だった。「わしに任せておけ」と言う話だった。暫くして、一緒に町長に会いに行こうと連絡があり、河野町長さんに面談してそのことを話した。

河野町長さんは「私に好い考えがあるので待ってください。また連絡します」との事だ。連絡は「藤田参議院議員（広島県前藤田知事の実父で、後に参議院議長に就任）のところと一緒に行きましょう」と言うことだ。河野町長は河内町内の出身の大原知事と親しく、その関係で大原知事の娘婿である藤田正明参議院議員と親密な関係にあった。

「青少年の健全育成を目指す若い先生方の計画を支援してやってください。お願いします」と辞を低くして依頼される姿を見て、これは生半可なことでは終わっては無責任だと感ずるようになってきた。また教員生活の両立はできないのではないかとも思った。その頃には同志も増えていた。宗本正記先生、平田忠之先生、木村隆紀先生、日高憲三（弟）だ。この先生方とは長い間の読書研究会のつながりがある。この四人に私を含めて五人、

これらの人に出資を願って、立地となる湖畔の土地を購入した。ダム周辺の地権者は、ダムの建設に伴う用地を既に提供しており、これ以上の用地買収は困難だという空気もあったが、松井正人、松井力、元岡晴人、各氏の協力でダムを一望する適地を確保することが出来たのだった。（続く）

（筆者は広島スポーツセンター理事長、元大和町長）



（写真は藤田参議院議長に陳情しているところ）

平成二十四年度青少年赤十字概況 (加盟校・加盟率)

平成二十四年三月三十一日現在

○青少年赤十字加盟校数

全国(単位:園、所、校)

校種	加盟校数
幼稚園	767
保育所	714
小学校	6,427
中学校	3,130
高等学校	1,813
特別支援学校	96
合計	12,947

広島県(単位:園、所、校)

校種	加盟校数
幼稚園	9
保育所	44
小学校	181
中学校	101
高等学校	56
特別支援学校	6
合計	397

○青少年赤十字加盟率(単位:校、%) (幼稚園、保育所は学校数から除く)

校種	学校数	加盟校数	加盟率(%)
全国平均	38,618	11,466	29.7
広島県	982	334	34.0

※加盟校数は文部科学省の「学校基本調査(平成23年度)」のから掲載

※加盟率は本社の平成23年度 青少年赤十字の概況から掲載

平成二十四年度役員

顧問

曾山 和彦
田中 博
田中 光枝

編集後記

団費節減のため、機関紙の発行を編集委員手作りのものに切り替えて早や三年目に入ります。その間、原稿集めや編集に手間取り、年度末ぎりぎりの発送となってしまい、皆様にはご迷惑をおかけしました。今年度は、新たな入団者を迎え機関紙発行も活気づきました。今後も皆様の声をお届けし、機関紙の使命を果たすよう頑張りたいと思います。お気づきのことがありましたら、どしどしお寄せください。

委員長
副委員長

幹事
監事

塚本 晃史
平越 幸男
森田 寛
横田 二郎
日高 敬司
射場 利久男
大木 昭
影山 龍児
河戸 靖子
光本 涼子
野田 崇
水野 善親
山中 章敬
采谷 宣子
吉丸 朝美(新)
恵美 勇作
門田 脩三

○編集委員(前列右から)

曾山和彦、日高敬司、横田二郎、
采谷宣子、射場利久男、野田崇、大木昭

